ネパール　ニルギリ北峰　未踏の西側の記録

青　木　達　哉（東海大学体育会山岳部OB）

【ニルギリ北峰西面の挑戦までの経緯】

私たち、青木と三戸呂は６年前の2018年にニルギリ北峰の北壁に挑戦した際、わずか200m程しか壁を登れずに敗退した。悔しいというより、自分たちの実力の無さを痛感し、そして北壁の巨大さに圧倒された。それでもこの巨大な壁の下部を非力ながらも挑戦できたことは大きな経験となった。下山した後、２人でまた再挑戦の約束をした。その２年後、世界は新型コロナウイルスによってとても生きづらい世界になった。私たちの活動もやはり影響を受け、登山に行こうものなら攻撃の対象としてちょうど良い標的にされた。



ニルギリ北壁

私たちはこの６年間、なるべく２人で登る時間を作るようにした。お互い仕事をちゃんとしている（そう自負している）為、なかなか時間を合わすことができなかったが、同年代で山岳部出身ということもあり、話も合い、良いパートナーと自然となっていた。三戸呂は山岳カメラマンとして海外の様々な山で活動してきたが、青木は６年ぶりの海外登山だったが、日本の冬山で自分の体に刺激を与えてきた。

そして2024年の秋、再びニルギリ北峰へ挑戦しに行った。６年間温めてきたとかそういう話ではないが、どこから登るのが最善か、そして魅力的かをなんとなく話しながら、パンデミックが落ち着いてきた頃に狙うルートを定めた。私たちがこの秋に狙うルートはまだ手付かずである北峰の西側からとした。北壁から逃げたのは単純に山頂に行きたいという思いと、惨敗した経験を再度繰り返すのでは、という情けない思いからでもある。しかし、西側も６年前の候補に挙げていたため、挑戦するにあたって２人とも異論なしで決定した。三戸呂は2022年にニルギリの偵察にも行っていた。ネットから見つけられるニルギリの西側の写真をPCにかき集めてどの部分がいけそうか、危険な箇所はどこか、BCはどこに建てられるかなど模索して、ついに一つのルートを写真に描くことができた。写真で見える大きな谷からアプローチをして西面の扇状の壁に取り付き、そこから頂上稜線へ抜け、最後の雪稜を詰めて



ニルギリ西面

山頂へ辿り着く。これが完成すると冒険的、かつ登攀要素の強い、アルパインクライミングができると気持ちが高揚した。

【出発前～高所順応】

今回の遠征前に、青木と三戸呂は三浦ドルフィンズにお世話になった。青木が高所に強くない人間で、なるべく出国前に高所順応の準備をしておきたかったのが理由だ。三戸呂はこの春にエヴェレストとローツェを連続登頂しており、毎年海外遠征を行っていたため、青木は後手に回っていると感じていたのは隠せない事実である。

低酸素室に入ったおかげか、６年前に高所順応で登ったトロンパス（5,400m）は、前回より格段に楽に登ることができた。その後、タパピーク（6,012m）で２回目の高所順応登山を行った。三戸呂は持ち前の体力と順応力で辛さを見せることはなかったが、青木はどうにかこうにか登りきり、高所の洗礼を受け、辛さを実感していた。



トロンパス



タパピーク

【偵察BC～5,400m付近】

タパピークで順応後３日間のレストを挟んで4,000mのベースキャンプまで上がり、翌々日の10月３日に偵察に向かった。偵察ではABCの設置場所と、ずっと懸念していた谷の内部の偵察を行う予定だ。ABCは4,200m付近のモレーン上に設置。そこから谷の半分の姿を見ることができた。しかしそこから見えた谷は威圧的であった。二段の岩壁が立ちはだかり、その二段目には10mはありそうな巨大なセラックが乗っかっていた。谷の中を２人で眺めながら２人は心の中で思ってしまった。「初日敗退か？」一段目（第一岩壁）はどうにかなるにしても二段目（第二岩壁）がかなり切り立っていて、セラックも巨大だ。しかしうっすらとクラックのようなものが左手側に見える。あそこを辿っていけばどうにか上がれるかもしれない。

偵察２日目はいよいよ谷の中の調査である。右岸左岸ともに落石が頻発しているが、うまく回避していき、第一岩壁が近づいてきた。それと同時に第二岩壁の様子もはっきり分かってきた。第一岩壁の傾斜はゆるいものの、落石が非常に多く、とても登れるルートではなかった。それに合わせて、第二岩壁に見えていたクラックのようなものは水流の跡であった。当てが外れたが、第一岩壁の近くまで行って左岸側にルートを見出そうと登っていくと、岩壁ではあるものの、比較的登れそうな壁が見えてきた。さらに観察すると、一箇所、落石の当たらない安全かつ、クラックを伝って上部に上がれそうなラインを見つけることができた。第一岩壁の右岸にいたた

め、落石に気をつけながら左岸へ移動し、傾斜の緩い取り付きへと登って行った。下から見上げると、これは登れるなと思わせるルートが見えた。

最初のピッチは緩い傾斜のロッククライミングを行い、垂直に近いコーナークラックを登っていく。20m程で一段棚に上がる。そこから、少し被ったクラックをピッケルのピックをしっかり効かせて２ｍ程這い上がる。さらに10m程伸ばすと、拳サイズほどのクラックで支点を作ることができた。リードはバックパックを背負わずに登ったため、かなり早く登ることができた。5.8 60m リード青木。

三戸呂はバックパックを背負いアッセンダーで登高。荷上用バックパックのサポートもしながらの登高でかなり頑張ってもらった。

２ピッチ目は最初だけ２～３ｍ程のクライミング。難しくないが、アイゼンが滑る。このピッチも60mいっぱい伸ばして、４ｍ程の岩で支点を取り、フォロワーを迎える。この２ピッチで第一岩壁を越えることができた。さらに10m程先には手頃な岩小屋を発見。この恐ろしい谷の中で唯一の安息の地である。その先には巨大な第二岩壁が立ちはだかっている。先が見えないため、少し早いがここをテント場（Camp1　5,000m）に決める。

まだ明るいため、第二岩壁の攻略のために偵察も行った。岩小屋左からを巻いて上部へ上がると、落石が頻発する第二岩壁の全容が見える。そこら中に落石のかけらが落ち、今もなおガラガラ音を立てて石が落ちてくる。下から見えていた巨大なセラックはさらに巨大に見えたが、比較的落ち着いていて、落ちる気配はなさそうだ。第二岩壁の左岸側に目を向けると、氷瀑が見える。氷瀑の下部は少し穴が空いてそうだが、多分登れるだろう。ある程度、目星をつけて、テントに戻った。谷の攻略の不安はまだ残っているが、安全なテント場にいるためか、気持



第一岩壁



camp 1



第二岩壁

ちも蘇り明日へ向けて眠りについた。

偵察３日目。今日の目標は西壁の基部まで辿り着くこと。今日中に谷の攻略ができるととても順調に遠征は進んでいる。今日もCamp１に泊まる予定だが、進み具合ではBCまで下山するため、お互い荷物を少なくした。青木は5,000mの高所で体調も優れず、空荷で登高する。

まずは朝イチでの第二岩壁の攻略である。昨日に目星をつけた氷瀑へ登っていく。氷瀑の取り付きには予想通り大きな穴が空いていたため、さらに左岸側へ迂回し、もう一つ存在していた氷瀑からトラバースを交えながら登攀。簡単なアイスクライミングを20m程行い、傾斜の緩い岩と氷の斜面を登っていく。プロテクションが取れないため、傾斜はないが慎重に登った。60mWIⅡ。さらに60m程詰めていくと、第二岩壁のセラックの上部に上がることができた。心配していたクレバスは見当たらなかったものの落石は相変わらず多く、小走りに通過していく。セラックへ上がったら再び右岸へトラバースし、ガレ場に残っている雪を繋ぎながら西壁全体が見えるプラトー（5,400m）を目指していく。昼頃には西壁の基部に辿り着いた。偵察はここまでとした。プラトーからは西壁と西稜がよく見えた。西壁は全体的に傾斜が強く、西壁の下部岩壁も想像以上に手強そうに感じた。それに比べると西稜の傾斜は緩く感じた。

BCに連絡を入れて下山を開始。青木の体調も万全ではない為、このままBCまで下ることにした。Camp１の前後の傾斜部はフィックスを張り、下降。17時過ぎにBCまで下山。

３日間のレスト中に狙うルートを相談し、西壁から西稜に変更。理由としては想像以上の傾斜と下部岩壁が手強そうという理由と、頂上稜線の雪庇の悪さなどを考慮した。今回の遠征も西側から登頂する



傾斜の緩いアイスクライミング



西壁



左の尾根が西稜

という目標のため、西稜に切り替えた。西稜の傾斜は緩くなるものの、ところどころに岩が露出していて、稜線ならではの強風が待っている。BCから望遠鏡を覗き込みながら、稜線の登攀をイメージした。

【アタック】

10月９日、BCを出発し、落石の多い谷を登り返し、Camp１まで登高。２人とも体調も良く順調な出だしだ。

10月10日、この日の目標は西稜の6,200m付近まで上がる。スマホで撮った写真を見る限り、そこまで時間はかからないであろうと思い。1,200mアップを目標にした。Camp１を出発してすぐ上のフィックスを辿り、第二岩壁の上部へ上がる。フィックスロープの支点がちょうど水流部だったらしく、支点が凍りつき、回収に時間がかかる。偵察で上がった5,400m付近を通過し、西稜のコルを目指してミックス帯を上がっていく。うまく雪壁を繋いでいくが所々クライミング要素の高いミックス帯を上がっていく。思った以上にスピードが上がらず、時間がかかってしまう。加えて右岸側からの落石が多く、十分注意しながら、運にも任せて登って行く。コルに近づく頃には天気が崩れ始め、強風と低温が厳しい。16時過ぎにようやくコルに上がるが、南風が強すぎるため、北側へ回り込むも、どちらも休まるところはない。標高は5,900m。これ以上の行動は危険と判断し、テント設営を開始。雪面を掘り、しっかり横になれるスペースを確保できた。



凍ったプロテクション

10月11日、７時前に登高開始。ロープを結び、60mいっぱい伸ばしながら同時登攀で登る。まだ日も当たらず、相変わらず強い風に堪える。１時間ばかり登ったが、手足の末端の感覚がなくなる。動いても体は温まらず、このままでは凍傷になってしまう恐れを感じ、一旦合流後、２人で以心伝心したかのように雪面を掘り、テントを被った。お互い寒過ぎて、手足の末端に血を流すように体を動かした。陽が当たるまでとても行動できない寒さだったため、陽が当たるまで待機した。１時間ほどで陽も当たり、登攀を再開。雪深い箇所が多く、ラッセルをしながら、ロープを伸ばしていく。この日は6,400mまで上がりたかったが、雪の深さに時間がかかってしまい、6,200mでCamp３を設営。すぐ先にはベースキャンプからも見える岩壁が立ちはだかっていた。この日はお互いにとても疲れ切り、朝の寒さに風邪を引いたかもしれない。頭痛や悪寒を感じながら夕食を食べた。夕食後、明日以降の行動のミーティングを行い、天気が明後日から悪くなっていくという予報のため、明日山頂アタックをすることに決めた。

10月12日、５時出発。出発してすぐにミックス壁を登攀。20m程登り、西壁側へトラバースすればこの壁は抜けられると思ったが、簡単ではなかった。トラバースを諦め、さらに10m程上がりピッチを切る。その先は緩いミックス帯となっている。トラバースをして西壁側に出て急な雪壁60mめいっぱい伸ばし、３m程のボルダーで支点を取った。支点を構築中になんとも古びた麻のロープらしきものを見つけた。もしやこれは初登頂の際に残されたリオネル・



４日目　稜線に向けて雪壁を登る



最高到達地点6,600m付近

テレイの残置物ではないだろうか。歴史を感じながらフォロワーを迎える。そこから先も傾斜は緩むことなく雪壁が続いていく。昨日の疲れもあり、ラッセル箇所では時間がかかる。青木の動きもだんだんと鈍くなっていった。6,500m付近で垂直の雪壁が出てくる。雪を崩して登ると乗越しが少しハング気味になる。雪を掘り起こしながら奥の氷で中間支点を取る。グレードをつけられない嫌なクライミングだ。スノーピケットを片手に持ち、三戸呂が執念でそこを越えた。すると傾斜が一気に緩くなった。山頂も目前のように見える（実際はまだまだ先だが）写真を脳裏に焼き付くほど見てきた光景が今目の前に広がっていた。もう少し頑張れば山頂だ。さらにロープを伸ばし、緩くなった稜線を登っていく。北側には見事に張り出した雪庇が美しい。6,600m付近。ミスしなければなんてことのない難しくない稜線だが、ここで青木の高度障害が強くあらわれる。嘔吐と眩暈がではじめた。10分ほど呼吸を整えるも回復せず、これ以上の登攀は危険と判断。下山することに決めた。三戸呂に荷物を分けて軽くし、スタカットで下山開始。青木は足元がフラフラで動きが遅いがクライムダウンを交えながら慎重に下降した。Camp３の上部100m程は懸垂下降を２ピッチで下った。この夜、青木は飲料だけ飲んで就寝。吐き気で何も食べられなかった。三戸呂は変わらず体調は良さそうだ。２人とも疲労も溜まり、寝袋に入って気がついたら眠ってしまった。

10月13日、天気が崩れる予報なので今日中にBCを目指して下る。青木は朝も調子が悪く、食欲もない。同ルートを忠実に降っていく。Camp２のコルからの下降で一箇所だけ懸垂下降を行った。谷の中は相変わらずに落石が頻発し、歩みを止めないよう素早く通過。谷の中を３回の懸垂下降を交えてアドバンスドベースキャンプまで下った。そこまでネパール人スタッフの方が迎えにきてくれていた。ベースキャンプまで着くと青木の体調も良くなり、夕飯を食べられるくらいに回復していた。

【高度障害】

青木が高度障害で出た主な症状は、目眩と嘔吐。6,500m付近から徐々に夢を見ているような感覚になり、足元がふらつく。痰が絡むような咳をしてそのまま嘔吐する。標高を下げると回復傾向だったが、下山中もその状態がCamp２（5,900m）まで続いた。原因は色々とあるだろうが、6,500mで垂直の雪壁を登った際に、無酸素運動を数分間行って、そこ

から体調が悪化していったように感じた。高所に弱いと自負している青木は、高所順応では6,000mの山を一座登ったが、もう少し高い山で順応ができていればいくらか違ったのではとも思った。ただ、周りに手頃な山は6,021mのタパピークしかない。

【懸垂下降】

西稜で2回（6,300m付近）、5,500m付近で1回、谷の中で3回行った。標高が上がるほど、岩質は脆く感じ、西稜での2回目の懸垂下降はフレーク状の岩棚にトライカムを効かせて下降した。谷の中の落石は多いものの、支点はしっかり取れたため、下降時の心配は落石以外にはなかった。

【食事】

朝は日清のお椀ヌードルを1個ずつ。夜はアルファ米。青木は高所で食欲がなくなるため、Camp 1以上の飯は朝晩ともにお椀ヌードルにした。他飲料、エナジーゲルを適量。